音　楽　科

徳　田　典　子
本　多　春　奈

1　音楽科における「よりよい未来を志向する子」

私たちは，日常生活の様々な場面で音や音楽にふれる機会をもっている。そして，音楽は私たちの感性を刺激し，生活に豊かさや潤いを与えてくれている。学校教育における音楽科でも，音楽のよさや楽しさを感じるとともに，思いや意図をもって表現したり味わったりする力を育成することを大切にし，生涯にわたって音楽文化に親しむための素地を養ってきた。

新学習指導要領では，音楽科で育成を目指す資質・能力を「生活や社会の中の音や音楽と豊かにかかわる資質・能力」と明示している。つまり，「生活や社会の中での音や音楽の役割と自分とのかかわり」「学んできたことと生活や社会の中の音や音楽とのつながり」，この点において子どもが興味・関心をもって探求できるような指導が求められている。

そこで，本校音楽科では音楽に豊かにかかわっていくために「音楽的な見方・考え方」を意識しながら音楽に向き合うことを大切にする。音楽を一方的な見方や感じ方でとらえるのではなく，その中にある様々な要素や仕組みを聴き取ったり感じ取ったりし，それらが音楽に与える効果や影響について理解できるようにする。そして，表現や音楽づくりの場での工夫につなげていく。また，学校での学びだけではなく，生活や社会の音や音楽とも結び付けることで，さらに豊かな音楽とのかかわり方ができる子どもの育成をめざしていく。

以上のことから，音楽科における「よりよい未来を志向する子」を次のようにとらえた。

- **音や音楽に目を向け　そのはたらきについて気付こうとして学習を積み重ねていく子**
- **音や音楽を通して　通じ合い　響き合い　共に創り合う体験から　自分の表現方法を明らかにしていく子**
- **今までの学習を生かして　生活や社会の音や音楽と豊かにかかわっていく子**

2　音楽科における未来へ生かする決める授業デザイン

音楽科の授業で子どもは様々な音や音楽にふれ，自分たちの音楽の幅を広げていく。表現（歌唱・器楽・音楽づくり），鑑賞の領域において，思考・判断・表現する一連の過程を大切にした学習や毎時間のふりかえりを充実させていくことで，子どもはどんな力がついてきたかを実感し，次の学びにつなげていくことができる。

まず，導入では子どもの音楽に対する興味・関心を引き出すために題材や学習材との出会いを工夫し，題材に期待感をもたせることで，意欲が持続していくようにする。学習の中で，子どもは様々な楽曲を通して音楽的要素と音楽との関係について学び，主体的に音楽を表現したり，鑑賞したりする経験を積み重ねる。さらに，個のふりかえりを通して自身の学びを確認，蓄積していくことによって，多種多様な音楽に出会ったとき音楽がもっているよさに気付くことができるようにする。

次の段階では個人での思考や表現だけではなくペアやグループでの協働を大切にし，新しい気付きや音楽の見方にふれる経験を積み重ねる。そして，音楽に対する考え方を広げ，感性豊かに表現する姿をめざしていく。グループで音楽表現を練り上げていく過程では，「前の時間ではこんな表現が見つかったよ」「この音をつかうと思いが伝わる」など，各々の考えを伝え合い，一つの音楽にまとめていく。子どもは全体でのふりかえりを基に様々な考えや表現方法を伝え合い，それを試していくことによって，自分たちの思いに合った表現方法を明らかにしていく。

題材の終末では，自分の学びをふり返り次の学びにつなげていくための省察を行う。音楽科では，生涯にわたって音楽に親しんでいくために，音楽に積極的にかかわり，豊かな感性で音楽に向き合おうとする姿をめざしている。そのために，省察を通してこれまでに学んだことや自分についた力，今後取り組みたいことなどを確認することにより，次の学びへの意欲をもたせる。子どもの音や音楽への興味・関心が高まることで，様々な音楽とのかかわり方を決める

ことができるようになり，生活や社会の中の多様な音楽への関心を高めることにもつながっていく。そして，普段なら聴き流してしまうような音楽に対しても，立ち止まって耳を傾けようとする豊かな音楽性を育むことができる。このような学びを積み重ねることで，子どもの感性や音楽性は豊かなものとなり，学校のみならず，自分たちの生活や社会の音や音楽への興味・関心へと広がっていく。そして，子どもが生涯にわたって音楽に親しんでいくための素地となっていく。

3　決める授業の手だて

⑴　学びへの原動力を形成する「決める」

新しい教材との出会いは，子どもにとって学びの第一歩である。子どもの意欲や学びへの原動力を喚起するきっかけとして，教材となる楽曲や学習材との出会いを大切にする。そして，これまでに聴いたことのない音や音楽に出会うことで感性を刺激し，「面白そうだ」「演奏してみたい」といった意欲につなげていきたい。

初めての教材や学習材に向き合う子どもは期待感に満ち，音楽との向き合い方や，アプローチの仕方，表現方法や題材に対し意欲をもって臨んでいる。子どもと教材との出会いの場が，学習全体の見通しをもつための場となるよう意識し，子どもが，この題材の終わりに「どんな力がつくか」「どんな表現ができるようになるか」などの自分の姿を想像することができる導入を行う。そのために教材の内容を吟味し，この題材を通してどんな表現をめざし，どんな力を付けていくのかを明らかにする。そして，様々な楽曲や学習材を通して，音楽的要素が楽曲に与える効果や影響について学ぶ経験を積み重ねる。このような学びの中で，子どもは自分で選択し，自分の思いを音にしたり，友達と協働して音を音楽に構成したりする経験を重ね，豊かな感性を育むことができると考える。加えて，ふりかえりを通して学びを蓄積していくことでより豊かな音楽表現につなげていく。

⑵　多様な視点から根拠をもって判断する「決める」

多様な視点から課題を追求していくために，ペアやグループ活動を適宜取り入れていくことを大切にする。そして，ペア・グループ活動を通して一人一人が思いを伝え合い，考えを広げ，豊かな表現につなげていくことができるようにする。さらに，子どもが協働して学びを深めていくために，工夫の視点を絞るなどの条件設定をする。「反復」をつかう，「強弱」を変化させる等，視点をはっきりさせることで工夫の内容が明確になり，思いや意図を伝え合いながら，つくり上げたものをふくらませたり練り上げたりしていくことができる。

多様な学習形態の中で課題を追求・検討し，子どもが様々な発想を働かせながら音楽に取り組んだり，個人やグループでのふりかえりを通して学びを実感したりする経験を重ね，共につくり上げる喜びを感じられるようにする。

⑶　今までの学びをふり返り 未来に役立てる「決める」

音楽科では，記述などのふりかえりを通して個人やクラスの学びを再確認し，得たことを実際に音に表すまでの過程を大切にしていく。

ふりかえりはこれまでの自分の学びを確認し，次の学びにつなげていくためのものである。題材を通して自分の音楽がどのように変容してきたか，どんな力がついてきたか，次の題材でもっと伸ばしていきたいことは何かなど，ふりかえりを通して学びがつながっていくような意識をもたせる。また，ふりかえりの視点を明確にすることで自己の変容と自身の成長を実感させ，意欲につなげていくことができるようにする。

個人でのふりかえりだけでなく，グループ活動やディスカッションを通して，個のふりかえりを全体の場で共有したり広げたりする場をもたせる。様々な考えを共有することで幅広い見方や考え方を養うことができ，豊かな音楽的感性の育成につながっていく。

さらに，題材のまとめとして省察を行うことで自分の学びの履歴を再確認し，今後の音楽とのかかわり方を見つめ直すことができる。このふりかえりや省察の積み重ねが音や音楽に積極的にかかわろうとする姿を育み，生活や社会の音や音楽に豊かにかかわっていく子どもの育成につながっていくと考える。